日中友好運動の過去・現在・未来

—高良真木のオーラル・ヒストリーに依拠して—

新　保　敦　子

はじめに

日中の国交正常化が1972年に実現してから，今年，2012年は40周年を迎えている。この間，日中友好運動は，多くの善意ある人々によって支えられてきた。

本論でとりあげる画家の高良真木（1930-2011年）（以下，人名については敬称略）は，日中国交回復から間もない1975年に成立した日中友好神奈川県婦人連絡会の会長として，長年にわたり日中友好運動に尽力してきた。残念ながら肺がんのため2011年2月1日に逝去したが，筆者は，前年の2010年11月6日に真鶴の自宅〈木の家〉でインタビューを行った[1]。その時は，病気のため酸素を常に離せない状態であったものの，気迫に満ち元気そうで，3時から4時の約束が8時近くまでに及び話がはずんだ。訪問から3ヶ月後の突然の訃報に驚くとともに，無念に思われてならなかった。

インタビューのきっかけは，第1に，高良眞木展（2010年10月4日から16日，東京京橋・ギャラリー川船で開催，画家としては「眞木」の表記を使用）を見学したことにある。そこに描かれた人間存在の孤独さ，そして孤独を乗り越えていこうとする芯の強さに思わず惹きつけられた。筆者は，自分が所属する宋慶齢日本基金会（後に，宋慶齢基金会日中共同プロジェクト委員会に事業を継承）で共に理事という関係から，以前から面識はあった。しかし「にこやかで優しく暖かい高良真木先生」という筆者のイメージを覆すような強烈な力が，その絵には溢れていた。

第2に，『高良眞木画集』[2]に掲載されている年譜から，真木が，戦後に参議院議員として活躍した母親・高良とみ（1896-1993年），さらに一生の師であった社会運動家の浜田糸衛（1907-2010年）の事蹟を受け継ぎながら，日中友好運動を支えてきたことを知ったことである。また三者が磁石のように反発したり，引かれ合ったりしながら，日中友好運動にそれぞれ尽力していることにも関心を持った。

高良真木の中国に対する思い入れの深さには，いつも圧倒されるものがあったが，それは，どこに由来するのか。また毛沢東を尊敬し，中国革命に夢を求めていた，そのエトスはどこから湧いてきたのか。三者の関係を中軸に据えながら，そうした疑問を，高良のオーラル・ヒストーリー及び関連資料から紐解いていきたい。

日中国交回復40周年にあたる2012年は，尖閣諸島の国有化を契機として日中間の様々な矛盾や対立が表面化した年でもあり，日中関係は大きな曲がり角を迎えている。こうした段階だからこそ，こ

の40年の歩みを，日中女性の草の根交流に尽力してきた一人の女性の生きざまを通じて振り返ることは，今後の方向性を指し示してくれるものと考える。また，高良とみ，浜田糸衛といった婦人運動家たちの傍らに立ち，一貫して支えてきた女性の歩みを記録することは，戦後日本女性史の上でも意義があると思われる。

本稿では，まず第1章で真木の母である高良とみについて述べていく。真木の活動を理解する上で，母・高良とみの存在は鍵を握ると言えるからである。第2章において，高良真木のおいたち及び日中友好運動への関与について述べるとともに，第3章では浜田糸衛について紹介する。第4章及び第5章では，日中友好運動の軌跡及び日中友好神奈川県婦人連絡会の活動について論じていきたい。

1，母・高良とみと日中友好運動

高良真木の母・高良とみは，1896年に，富山県高岡市桜馬場にて，和田義睦・邦子の長女として生まれた[3]。父は土木技師で公務員，母は共立女学校で学んだインテリで日本キリスト教婦人矯風会で活躍した。とみは母親の影響もあり，クリスチャンであった。

1917年に日本女子大英文科卒業後，同年12月に渡米し，心理学者，教育学者のエドワード・ソーンダイク（1874-1949年）に指導を受けながらコロンビア大学大学院，ジョンズ・ホプキンズ大学大学院で学び，哲学博士の学位を得た（専門は教育心理学）。1922年7月に帰国後は日本女子大家政学部教授として教鞭を採る一方，女性の地位向上のための社会運動に積極的に関与していく。

また日本女子大在学時に，インドの著名な詩人でありアジアで初めてノーベル賞を受賞したタゴール（1861-1941年）と出会い，深い思想的影響を受けた。そしてタゴールの来日に主要な役割を果たして通訳としても全国公演に同行した他，インドにガンジー（1869-1948年）やタゴールを訪問している[4]。さらに中国で魯迅（1881-1936年）に会うなど，国際的にも活躍していた[5]。しかし戦中には，大政翼賛会中央協力会議婦人代表として活動に参加し，戦後の回想の中で，「あれはわたしの生涯の最大の汚点だった」と，とみは次女の高良留美子（詩人，女性史研究家）に語っている[6]。

戦後，高良とみは，華々しい活躍を遂げていく。1947年に第1回参議院選挙に当選，52年に帆足計衆議院議員，宮腰喜助衆議院議員とともに「鉄のカーテン」と言われたソ連，「竹のカーテン」と言われた中国に行き，世界的なニュースとなった。特に中国では日中第1次民間貿易協定を結び，それまで閉ざされていた日中関係の扉を大きく開くことになる。

具体的な経緯を『日中友好運動五十年』から見ていこう[7]。まず帆足に52年にモスクワで開催される国際経済会議への出席が，中国側から要望された。モスクワ国際会議の発起人の一人であった中国人民銀行総裁南漢宸が，同国際会議において日中貿易の発展について相談することを希望したためである[8]。帆足はソ連・中国の訪問に積極的に協力してくれる人物として高良，宮腰に声をかけた。

法律的にいえば日本はソ連とはまだ戦争状態にあった時代であるが，高良はシベリア抑留者，さらに中国居住日本人の引き揚げ交渉をしたいと考えており，快諾した[9]。

しかし，日本政府はアメリカと協調して共産圏を封じ込める政策であったため，ビザは発給しない

方針であった。前年の1951年9月8日には，サンフランシスコ講和条約及び日米安全保障条約が締結されており，日本はアメリカとの軍事同盟国としてのサンフランシスコ体制に組み込まれていったからである。

そのため，高良は自分自身が携わっていた緑化運動の関連でユネスコ連絡委員会に参加するということでパリ行きの旅券を取得し，3月21日に東京を出発する。パリで高良は，パリ日本政府在外事務所長のポストにあった知人である萩原徹に，モスクワ行きへの協力を頼んだ。彼は驚いたが，入国の仲介者としてパリのデンマーク大使館を紹介した[10]。

高良は，デンマーク，ヘルシンキを経てモスクワへたどりついた。ビザ無しでの入国であった。モスクワへ着いたのが，4月5日。すでに会議は始まっていたが，9日に日本代表として演説をすることができた。はるばる日本からただ一人，困難を克服して会議にかけつけた振り袖姿の彼女に，会場は拍手と励ましの言葉でどよめいたという。

すでに，7日には，高良のモスクワ入りが外電で日本に伝わっていた。高良がソ連に入ったのは，サンフランシスコ講和条約と日米安保条約の発効日（1947年4月28日）の20日ほど前であった。そうしたデリケートな時期であったため，吉田内閣も米国政府も激怒した。衝撃を受けた政府は，保利茂官房長官が，「政府は，モスクワ経済会議に旅券を発給しない方針をとっていた。にも関わらず，高良女史のような学識ある人が法律に違反した行動をとったとすれば，はなはだ遺憾なことであり，旅券法違反などで処置することになろう」と談話を発表した。

旅券の取得に手間取り，出発が遅れた帆足と宮腰がモスクワについたのは4月29日であった。モスクワで帆足と宮腰との到着を待っていた中国政府貿易部副部長の雷任民は，会談の結果，日中貿易促進のための具体的な方法を北京で協議することになった。そこで3人は5月15日に北京に入った。彼らは新中国成立後初めて中国を訪れた日本の政治家であったが，北京で太平洋地区平和会議に出席し，日中第1次民間貿易協定を結んだ。

この協定は，形式こそ民間であったが，日本と新中国との間で，初めて成立した協定であり，「貿易にとどまらず，いわば諸交流のパイプとしての役割を果たす」ことになり，「戦後の日中関係史上で占める意義は，・・・極めて画期的なもの」であった[11]。そしてアメリカと日本政府による封じ込めを破り，日中貿易の道を切り開いたばかりでなく，日中友好の道も切り開いたのである[12]。

高良とみは，彼らよりも遅れて7月15日に帰国した。国交の無いソ連・中国に入国したことで，旅券法違反として大騒ぎとなっていたが，帰国時には婦人団体が団結して羽田まで迎えにいった。帰国翌日に高良とみはは外務省に行って，ビザが無しで入国したことを伝えた。「旅券には入ってはいけないと書いてあるけれど，罰則規定は無いはね」とうそぶいた，という（真木インタビュー）。

7月27日，「高良とみ子女史帰朝報告婦人大会」が東京日比谷公会堂で開催されたが，約3000人が入ったと，真木は語る。この時の講演内容は平和のための女性の結集が必要である，といった内容であり，後に「祖国の婦人に訴える」というパンフレットにまとめられて全国に配布された[13]。結局，高良とみは逮捕されなかった。「時代の熱気のため，逮捕できなかった」という（真木インタビュー）。

当時の状況を見ると，1951年秋の講和及び安保条約批准以来，日本国憲法下で再軍備への動きが始まり，「婦人団体協議会」が休会して女性の統一行動の足場が失われていた。しかし「女がなにかはじめようとしている―そのシンボルともいえるようなできごとが，1952年4月の参議院議員高良とみのモスクワ訪問であった」という[14]。

そして高良とみ帰国報告婦人大会は1ヶ月の準備を重ね約30団体が手を組んで見事な成功をかちえた[15]。会には，平塚らいてう，深尾須磨子，神近一子の歓迎の言葉など，豪華なメンバーが名前を連ねた。こうした女性達の動きをそのまま解散するのは惜しまれることから，結集したメンバーによって日本婦人団体連合会準備会が生まれ，翌年，日本婦人団体連合会が組織される（会長：平塚らいてう，副会長：高良とみ，事務局長：浜田糸衛）。参加団体は30団体で国際民主婦人連盟（国際民婦連）に加盟した（真木インタビュー）。

高良留美子は，次のように語る。「敗戦後の高良とみの活動は，いまでも語り草になっているほど華々しいものがあった。ことに1952年にいわゆる鉄のカーテンと竹のカーテンを破ってソ連・中国への道をひらいたことは，当時の日本の女性たちに大きな励ましと自信を与え，その影響は有形無形に今日の女性解放や反戦平和の運動にまでつながっているように思う。最近も，こうした運動の中心的役割をになっている友人の一人に会ったとき，高校生のとき受けたそのときの感動を，「天照大神が天の岩戸をあけたような」と形容した。・・・婦人運動が30を越える参加団体によって自主的な統一組織をもったのも，その基調報告がきっかけだった」[16]。

1953年，高良とみは参議院全国区から立候補し当選した（1947年からの1期目に引き続いての2期目）。

2，高良真木のおいたちと初めての訪中

高良真木は，1930年12月8日，東京府豊多摩郡落合町大字下落合（現，新宿区下落合）において，父武久，母とみの長女として生まれる[17]。父は九州大学医学部を出た精神医学者であり，森田正馬博士（東京慈恵医科大学教授・森田療法創始者）の下で，根岸病院の医長を勤めていた（後，同大学精神神経科助教授を経て，教授，名誉教授）。

高良真木は自由学園，日本女子大付属高女に学び，1947年に東京女子大学外国語科に入学した。しかしその後，1949年からアメリカインディアナ州リッチモンドのアーラム・カレッジ（クエーカー教徒の学校）に転入学。真木によれば，「母親から一番遠いところへ留学」したかったという（真木インタビュー）。

次女の高良留美子は，次のように母・高良とみについて語っている[18]。「・・・彼女の存在そのものが，わたしたちにとって不合理そのものだったせいなのかもしれない。つまり，うっかりしているとわたしたち自身が「合理化」されてしまいそうな危険があったのである。母は私にとって初めての，強大な，いささか強大すぎる他者であり，愛憎の対象であり，たたかいの相手であった。・・・　高良とみを母親にもつということは，生やさしいことではなかった。人一倍冷静な平常心の持ち主だっ

た祖母と，家族への責任感のつよい父がいなかったら，私たちは一種の精神的脱水症状を起こして，とうの昔にこの世からおさらばしていたにちがいない。・・・18才の妹美世子の死は，わたしたちの経験してきたすべての矛盾の，もっとも壊滅的な帰結であり，終結だった」。

さらに次のように記している[19]。「この本（『非戦を生きる—高良とみ自伝—』，筆者注）の原稿をよんだあとで姉に会ったとき「『妻として母として』というような言葉が本文中に何度かでてくる」と話したところ，姉は最近の教科書問題になぞらえて，「それは歴史の改ざんだ」と叫んだ」。

高良真木の告別式の挨拶の中で，留美子は，「私たちは変わった家で一緒に育ってきた。孤独かつ自由に育ってきた」と語っている。つまり「姉と私は，高良家という実に変わった家で，精神的にも，またときには実際的にも，まるで孤児のように生きていた」のである[20]。真木の絵に描かれた，孤独，そしてじっとそれに耐える強さは，こうした家庭の背景と不可分のものなのであろう。

アメリカでの3年間，真木は新聞を一行も読まなかった。日本では1952年の血のメーデー事件の時に，皇居前広場で一人が亡くなり，これはアメリカでも報道されて知っていたが，全くのノンポリ学生であった。アメリカから帰国する時に，友人が「あなたは共産主義にかぶれるかも」と言った。友人はオーウェルの『1984』を持たせてくれた。「今も手元にあるが，全く読んでいない」と真木は笑いながら語っていた（真木インタビュー）。

アメリカ時代の思い出として，NYのエンパイア・ステートビルでのおみやげ（金属の小さなもの）に，made in occupied Japanと刻まれていたことがあるという。真木のアメリカに対する距離の置き方は，日本を占領したアメリカへの留学経験と不可分であるように思われる。

1952年6月にカレッジを卒業後，真木はロサンゼルスから帰りの船に乗船し，ハワイに着いた。その時に新聞記者が船に乗り込んできてインタビューを始め，母（高良とみ参議院議員）が旅券法違反でソ連，中国に行ったことを初めて知った（真木インタビュー）。

こうした真木であったが，思いがけないきっかけから，母・とみが中国を訪問した翌年の1953年に訪中することになる。

真木は1952年に帰国していたが，1953年6月5日から11日にかけてコペンハーゲンで開催された国際民主婦人連盟（社会主義圏を中心とするの女性の組織）主催の第2回世界婦人大会に，通訳として参加することになった（団長；参議院議員高田なお子，事務局長；浜田糸衛，団員；羽仁説子）[21]。

真木は，「母親が，自分を無理矢理突っ込んだ」と語る。真木の葬儀の時に，高良留美子が語ったエピソードによれば，真木にはアメリカで結婚しようとしていた恋人がいたが，結婚できず，真木が息を引き取る直前に，留美子は初めて，その人の名字を教えられたという[22]。また臨終の床にありながら，真木は筆談で，「戦争でガタガタ」と書いたとのことであった。恋人の喪失は，耐え難い思い出として胸の奥に長年秘められていたのであろう。

何ヶ月も，あまりに落ち込んでいた真木のため，母親が世界婦人大会への出席をアレンジしたという。当時の真木を知る荒川富士子（故人）によれば，真木はベレー帽を被り，どこか斜に構えて我関

せずといった様子だったという[23]。

この時も，社会主義圏を中心とする女性の世界的組織の大会ということで，旅券の取得が困難であった。政府は旅券公布を拒否し，メンバーは連日外務省に出かけて陳情したが右翼と小競り合いが起き騒ぎになった[24]。その結果旅券が発行されたが，旅券には，「この者は外貨を一銭も持っていないので，社会主義圏に入れない」と書いてあった。また会議に間に合ったのは，原爆の図を描いた赤松俊子（後の丸木俊）だけだったと真木は語る。

コペンハーゲンに集まったのは，社会主義圏を中心とする67カ国7000人の女性たちで，そのとき，「是非，ソ連，中国に来てくれ」と要請があった。

団長の高田なお子は，日教組出身の社会党系であり，イギリスで開催される世界教員大会に行くスケジュールをすでに組んでいた[25]。真木によれば「若い参加者は行くところが無いし，会議にも間に合わなかったので，行きましょう，ということになった」。この決定のために，二日間，激論した，という。

浜田を団長として，赤松俊子や高良ら7名がソ連に2週間，中国に2週間行った。ルーマニアのブカレストで会議があったので戻り，またコペンハーゲンに行った。団としては，すでにコペンハーゲンで解散していたが，浜田が高田に団の解散の発表は日本に帰ってからにして下さいと頼んだという。これを語る真木の口調は，浜田先生はさすがであるといった，誇らしげな口調であった。

日本国内では，中国に行ったことで湧いていて，高田は帰国後も解散したと言えなくなった。9月17日に世界婦人大会の報告会が，早稲田大学の大隈講堂で開催され，片方は東陣営，片方は西陣営（赤松・浜田はソ連，高田はイギリス）へ訪問した，ということで注目を集めた。以後，全国で500回に及ぶ報告会が開催され25万人が参加したと言う[26]。

高良真木にとって，この外国訪問は，真木が生涯の師として慕う浜田糸衛との出会いという意味で，大きなものがあった。

3，浜田糸衛との共同生活

真木は代表団と分かれコペンハーゲンからパリに行った。そこで2年間（1953年6月～1955年5月），絵を学び，日本に帰国した。一度は実家に戻ったものの，再び家出をして，57年春頃から社会運動家で作家である浜田糸衛の中野区沼袋の家に身を寄せた[27]。

浜田糸衛は，1907年高知県吾河郡伊野町に，浜田惣次・春尾の三女として生まれる[28]。幼少時代については，自伝的児童小説である『あまとんさん』（農文協，1995年）に詳しいが，自然児としてのびのびと育った。また『あまとんさん』には，巡査の前で兄から教えられた「オオタモタロ（乞食），ガ，ウエニナリ，テンノウ，ヘイカ，ガ・・・(シタニナル)」といった歌を歌って巡査に怒られたといったエピソードが生き生きと描かれている。大正デモクラシーの自由な雰囲気の中で育ったことがわかる[29]。

1919年に高知県立伊野尋常小学校を卒業，1924年に高知県立第一高等女学校を卒業後，高知県長

者村小学校で代用教員となる。後，京都市立三条隣保館や，被差別部落で保育，生活指導を行った。1933年に上京後，青踏社の名付け親である生田長江（1882-1936年）に師事し（生田の最後の弟子），さらに本所・深川の奥むめお（1895-1997年）のセツルメントで働く。

1938年に中国に渡り，国産電気に勤めた。中国には紙芝居を持っていったが，それで中国人と仲良くなりたいと，思っていたそうだ（真木インタビュー）。国産電気では，社内報の編集に携わり，従業員の厚生・文化活動を展開。1943年に引き揚げ後，大日本産業報国会に副参事として勤務した。

満洲での経験を，浜田はあまり語りたがらなかった，という印象を宋慶齢基金会日中共同プロジェクト委員会の久保田博子は持っている。

1954年10月に中国紅十字会代表団（李徳全団長，廖承志副団長）が，新中国から，最初の訪日団として来日した。歓迎会の席上，李は出席していた浜田に「李けいゆを知っているか」と，尋ねた。国産電気の従業員で，かなり日本語ができたらしい。李けいゆから李徳全へ「浜田は本当の友人である」と手紙が来たそうである。日本人への反感が強い時代であったのに，それほどまでに浜田は中国人から慕われていたことを物語るエピソードであろう（真木インタビュー）。

浜田糸衛と高良とみは，婦人運動の同志であった。また浜田糸衛と高良真木とは，1953年の第2回世界婦人大会代表団以来の知己であり，共に中国を訪問した関係にあった。帰国後，実家を飛び出した真木が身を寄せたのは，師と仰ぐ浜田の下であった。こうして，浜田の逝去までその後55年間にわたって続く，浜田と高良真木との共同生活が始まった。　高良と浜田は，1963年から真鶴の2000坪の傾斜地（1959年に建てられた高良家の別宅）に転居，以後，終生，ここに居住した。2000坪の広大な土地には，ミカン，レモンなどの果実，水仙，バラなど四季折々の花が咲き乱れ，訪れた者の心を癒してくれる。

写真　高良真木と浜田糸衛。高良邸にて。2001年撮影。
（日中婦連提供。番場一郎撮影）

浜田は社会運動のかたわら文筆活動を展開し，『野に帰ったバラ』（1960年），長編童話である『豚と紅玉』（1980年）などの作品を発表していく[30]。高良真木はその作品に，表紙や挿絵を描く。パリ時代の孤独感，寂寥感あふれる絵画とは異なり，優しさに満ちた作品群が誕生した。

ちなみに，『豚と紅玉』は，豚と紅玉との友情の物語であるが，宇宙に生きている万物のはかなさと命の尊さ，出会いの大切さと別れの切なさを感じさせてくれる物語である。女性史家であり，浜田と同じく生田長江の弟子であった高群逸枝は，生前，この作品に対して「人間のほんとうの幸福をねがう心を，これほど純粋に示してくれる作者は，日本には稀れです」というメッセージを寄せている[31]。

高良真木へのインタビューの中で，『豚と紅玉』が早稲田大学の中央図書館に収蔵されていることを伝えたところ，感激した様子であった[32]。

4，文化大革命から日中国交回復，日中友好神奈川県婦人連絡会の設立まで

浜田は，筋金入りの社会運動家であった。1960年は反安保闘争の時代であり，同年6月15日に東大生・樺美智子が逝去した。日比谷の野外音楽堂で開かれた全学連の集会の時に，共産党や野坂参三は欠席した。浜田が「なぜ野坂は出て来ないのか」と親しかった共産党の女性に聞いたところ，「最前列に鉄砲を持った集団がいて，出てきたら鉄砲で撃たれるから」とのことであった。それに対して浜田は「野坂は畳の上で死ぬ気か」と言ったという。このエピソードを語る時の高良は，さすが浜田先生という口調であった。

一方，日本共産党と中国共産党とは，対ソ政策の路線対立から関係が決裂した（1966年3月宮本顕治の訪中時における毛沢東・宮本顕治会談の決裂）。1966年から始まる文化大革命前後の影響もあった。こうした動向を日中友好運動は色濃く反映することになる。

たとえば1966年，日中友好協会は，北京放送の聴取者代表10名を中国へ派遣することになった。しかし「日本共産党が降りたため，枠があるので行って欲しい」，という要請が日中友好協会の斎藤きえ（総務）から来た（真木インタビュー）。そのため，第三次北京放送聴取者代表団（浜田糸衛団長）に，高良は秘書長として参加した。

この間の経緯について，高良真木は次のように語る。当時，すでに1966年8月，文革が発動しており，紅衛兵が全国を大移動した（経験大交流）。代表団はそれに同行しながら，9月から10月にかけての約40日間，北京→杭州→広州→井岡山まで行動を共にした。

江西省の井岡山には途中で2泊してようやく夜8時に到着した。寒くて綿入れを貸してもらった。夕食後，疲れていたが，井岡山の歴史の講義があるという。講義が終わったのは11時過ぎであった。講義の最中に日本の代表団は皆疲れて，思わず居眠りをしたところ，「アフリカからの代表団は寝ていないのに，アメ帝との闘争の最前線からきたはずの日本代表は，なぜ寝たのか」と批判された。本人たちには闘争の最前線のつもりはなかったが，中国側は，そう考えていたのである。その後，10月1日の国慶節に参加して，漸く日本に帰国した。

帰国後，日中友好協会は分裂し，「日中友好協会（正統）」（旧社会党系）を新しく組織し，浜田や高良は参加した（浜田は後に協会理事から参与へ）。

平塚らいてうが文革の時に，「今の中国はどうなっているのか」と聞いたが，真木自身もよく説明できなかった[33]。「『天の半分』をテキストとして学んだ。しかし犠牲者を出した。文革の理念は間違っていたのか。自分の中でもちゃんとしていない。今でも，どう評価していいか，よくわからない」，と真木は語る。新中国に理想を求めていただけに，「文革に失敗の烙印が押された時，真木の苦悩は深かった」と，久保田博子は語る。

1972年の田中首相訪中の直前に，日比谷で国交回復促進大会が開かれ，全国から5000人～6000人が集まった。こうした時代背景を受けて，1972年9月，田中内閣が国交回復に成功し，新しい日中関係の時代が到来した。

その後，75年に日中友好神奈川県婦人連絡会（以下：婦連と略称）が設立され，日中女性の交流，華僑・留学生との交流，日本軍「慰安婦」問題を中心とした歴史認識問題への取り組み，日中関係の学習会開催，募金活動など，友好・平和・女性のため多くの事業を展開した。

また84年に設立された宋慶齢日本基金会の立ち上げに，高良とみ，高良真木親子はともに協力し理事として参加した（宋慶齢日本基金会は2000年解散。2000年に創設された宋慶齢基金会日中共同プロジェクト委員会に事業を継承）。

こうした事業協力の一つに，97年以降，2012年現在まで継続的に行われている寧夏回族自治区西吉県の女子職業訓練センターへの支援がある（宋慶齢日本基金会の寧夏プロジェクトへの協力）。同センターでは，女性たちが裁縫，裁断，刺繍などの技術を身に付けるとともに，養蚕，衛生知識なども学び，農村地域の回族女性の地位向上に貢献している。

婦連では，教室棟建設のための資金援助やミシンの贈呈を行った。その後も，資金援助だけでなく手紙やニュースも送り，一貫して継続的な支援を行ったことは特筆に値しよう。なおセンター主任の馬秀明からは，「成果を上げる事ができましたのは，すべて貴会の多年にわたる資金物資援助によるものであると，私たち姉妹は感謝の気持ちでいっぱいです」との感謝状が寄せられている[34]。

5，嬉しい時にも，苦しい時にも友好

1989年6月2日，婦連の代表団が中国に到着，3日，敦煌の莫高窟を見学した。しかし6月4日に天安門に入れず，途中で旅行をやめて羽田に帰着する。天安門事件の開始であった。

中国共産党の天安門事件での武力行使に抗議して，婦連は抗議文を書き，中国に送った。日本全国で抗議文を出したのは，婦連と埼玉日中，他1箇所の3箇所だけであったという（真木インタビュー）。中国の間違っている点に対して，きちんと物申す態度は，特筆すべきであろう。

しかし翌90年，婦連結成15周年の際，浜田は中国婦女連から代表団を招聘することを主張した。どんなことがあっても交流すべき，というのが浜田の考えであったが，婦連のメンバーは呆れた，という。中国側も一番，「文句を言った所が招待したので驚いた」が，3人が来日した（広西の婦女連

会長・周菊栄団長，張静（通訳））。また浜田が「訪日代表団に対して天安門の話をするな」と言ったので，「皆，さらにあっけにとられた」という（真木インタビュー）。

訪日代表団は，女性の職業訓練施設，老人ホーム，消費者運動，聶耳（中国の国歌の作曲者，藤沢市の鵠沼海岸で溺死）の記念碑を訪問し，6日目に，神奈川県立かながわ女性センターに宿泊した。その時のことである。

団長「浜田先生は鄧小平が嫌いだそうですね」。

浜田「売られた喧嘩はかいましょう。あの広場に若い人がいた。なぜそこに自分から出ていって対話しないで武漢に行ったのか。人民を恐れて何の共産党か」。

団長「あの時，台湾，香港のスパイが多数いました」。

通訳の張は，「天安門について抗議した婦連が呼ぶので，何かあるはずということで想定問答を勉強してきた。天安門について言及しないと報告出来ない。そのため話題として出した」と語っていた，という（真木インタビュー）。

また返礼宴では，次のようなやりとりがあった。

団長「日本に来て日本で有名な浜田と議論できて光栄です。私が討論に勝ちました」。

浜田「日本には遠来の客に花をもたせる，という言葉がある」。

中国に対する毅然とした態度，その中でも，あくまでも友好を貫く姿勢，機微に満ちたやりとりから，高良は浜田を一生涯の師として尊敬していたのであろう。

その後，95年，浜田を団長とする婦連の代表団は第4回国連世界女性会議のNGOフォーラムに参加するため，北京を訪れた。高良真木は，『事務局ニュース』NO.4（第35期）（2010年）に次のように書いている[35]。

「1995年夏，・・・浜田糸衛と私たち22名の会員は，アジアで初めて開かれる第4回国連世界女性会議のNGOフォーラムに参加するために，北京に着きました。天安門広場には，「抗日戦争・世界反ファシズム戦争勝利50周年」の垂れ幕がかかっていました。・・・この旅の報告集の第1ページに，浜田は積年の思いを記しています。〈おおきな大きな白いハトが，北京の空を，ゆったりと，とびつづけている。／　私たちは，このハトに迎えられて，まず北京に来た。／　幾十年と長い歴史を，中国は，日本をはじめ他国に侵略されてきた。／　今日は，私にとっても，無情のよろこびであった。／　日中両国，世界の人民は，いかなることがあろうとも，親愛，友好の道を踏みはずしてはならない。〉（1995年8月30日）」

高良へのインタビューによれば，会場の空には張り子の白いハトが，まわっていた，とのことである。

また高良によれば，浜田は，「21世紀の半ばに中国は世界一の国になる。そのことは疑いのない事実である。そのときにも決して中国は覇権を行使しない（毛沢東思想あるかぎり）」と一貫して語っており，これを中国側にも伝えたという[36]。大国になった時に，中国はどのように振る舞うのかという鋭い問いかけを秘めた発言でもあった。

写真　日中友好神奈川県婦人連絡会の皆さん。前列中央は高良真木と浜田糸衛。2001年撮影。（日中婦連提供。番場一郎撮影）

この言葉は，浜田が生前，度々言っていた言葉であり，2010年の浜田の追悼集会でも紹介されている。婦連の友人で『人民中国』副編集長から浜田逝去の1ヶ月後，「そこまで中国を支持して頂いてありがたい」と追悼の手紙がきたという。

「浜田先生が，決して中国は覇権を行使しない，と言ったのは，希望だったのでしょうか」との筆者の質問に対して，高良は「希望ではなく，歴史的経緯を踏まえ歴史はこちらに動くという認識があった。被支配の歴史があるので中国はそうしないといった歴史への信頼，毛沢東思想への信頼があった」という。日中友好運動に邁進してきた浜田糸衛・高良真木師弟の信念の強さが，その言葉からは伺えた。

おわりに

日中友好運動に関わっている者の多くは，自分自身，あるいは親や親しい知人が戦前に中国で暮らし，中国に縁を持っているように思われる。日中友好運動の扉を開き日中関係の基礎を築いた母・高良とみ，また戦前に満洲に住み社会運動家として活躍していた浜田糸衛との出会いから高良真木は，日中友好運動に関わっていく。

女性史家のもろさわようこは，真木への弔辞の中で「母親の志を，淡々と受け継ぎ実践してきた」と語っている。高良とみは，かつて自伝の中で，外交官らがつくる国際関係は信用できない，国の表側と表側の付き合いでは本当の意味での友好関係は作ることができない，民間の人々同士の外交こそが，平和につながる，と述べている[37]。

母・高良とみに対する真木の反発は相当なもので，その結果，真木は家出した。しかしながら，母

親が蒔いた日中友好運動の種に水をやり大切に育てた一生であった。また，最後の最後まで，高良真木は日中友好運動に対する強い思いを持っており，インタビューにおいても，「日中は絶対に戦ってはならない」と語っていた。

高良の絶筆となった『事務局ニュース』NO.2（第36期）には，日本は「西洋覇道の番犬となるか，東洋王道の干城となるか」という，孫文が1924年に神戸で行った「大アジア主義」の演説とともに[38]，「'嬉しいときも，苦しいときも友好' 日本と中国との平和と友好のきずなをいっそう強めましょう」とある[39]。

2011年1月31日付けの消印のある高良真木からの寒中見舞い状には，「昨年は4月，2年来の肺疾患の再発で入院，5月退院，6月生涯の師・浜田糸衛との永別，酷暑の夏をすぎて9月『高良真木画集』出版と，10月記念画展，その間には日中関係の暗転がありました。友情に支えられ，励まされた一年でした。

今年は，20年来果たし得なかった浜田糸衛事蹟の記録と秋の画展（平塚市美術館）に向かって一日一日を大切に生きていきたいと念じています。一陽来復，梅のつぼみが開きはじめました。2011年大寒　高良真木」とある。

高良の長年の友人であり宋慶齢基金会日中共同プロジェクト委員会を立ち上げた久保田博子は，浜田が寝てから高良と電話をすることが多く，ついつい長い電話となったという。そんな時，浜田が起き出してきて，「高良，高良」と大きな声で呼んでいた，と語る。またここ数年は浜田の看病に追われて，高良自身の活動にも制約が加えられる状況であったようである。

2010年の浜田糸衛の逝去後，看病に追われなかなかまとめることができなかった浜田の事蹟を記録することを高良は生き甲斐にしていた。このはがきを2月1日に受け取った直後，高良真木が逝去(2011年2月1日午前8時）したとの連絡があった。

実は，インタビューに際して筆者は，生い立ちや浜田との関係についてもっと聴きたかった。筆者は浜田に，一度，会ったことがある。浜田は鬘鑠として自信に満ちあふれた印象であったが，それとともに長年，車椅子生活を強いられることから来る焦燥感も感じ取られた。そうした浜田に，高良は心から尽くしている様子であった。同居していると聞き，自分の親でもないのにと驚いた。

つわものである母親の下を脱しながら，つわものである浜田の下に身を寄せる。それはなぜなのか。しかし，高良との話で思わず気づいたことがある。浜田を語る時，高良の表情が生き生きと輝くことに。「先生は，さすが」という，自分の師を誇らしく思う気持ちが強く伝わってくる。

そういえば，孤独の影が漂うパリ時代前後の絵に比べて，浜田の挿絵に描かれた絵は素直で優しい。精神的な孤児であった高良真木にとって浜田は唯一の救いだったのであり，安心して心を許せる存在だったのであろう。

また，母親と対立し家出をしながらも，母親の晩年にあたっては，真鶴の地に母親を引き取り最後まで世話をし看取ったという[40]。高良真木の人間としての限りない優しさを感じる。

最後に，インタビューを終えようとした時に語られた高良真木の言葉で本稿を締めくくりたい。「戦

争が終わったのは，14 才の時だった。革命はいまだならず。平和も実現してない。資本主義の克服も実現していない。平和憲法 9 条の改訂の話が出ている。世界は逆方向にある。

社会主義が崩壊して資本主義が台頭している。このままじゃとても死にきれない。展望だけは押さえて，死にたいものだ。

特に 9.11 以降，アメリカを頂点とする資本主義が崩壊の過程に入っている。どうやって崩壊するのか，その後の社会はどうなるのか。あと 5 年生きるか，10 年生きるかわからない。崩壊が戦争で終わらないことを祈っている」。

おそらく，まだまだ生きて活動を続けるつもりだったのだろう。日中国交回復 40 周年を迎えた 2012 年に日中の対立は表面化しているが，そうした状態を，高良であればどんなに嘆いたことだろうか。日中は絶対に戦ってはならないという，その志を，後に続く者として微力ながら受け継ぎたく思っている。

これまで日中の女性の草の根交流に，全身全霊を込めて尽力されたことに敬意を表するとともに，ご冥福を心からお祈りしたい。

本稿の執筆にあたっては，高良真木の妹で詩人の高良留美子氏，宋慶齢基金会日中友好プロジェクト委員会の久保田博子氏にお世話になった。また日中友好友好神奈川県婦人連絡会事務局の番場明子事務局長には資料の提供をして頂いた。ありがとうございました。

注

（1）〈木の家〉は高良家の敷地内に 2002 年に建てられたグループホーム（全 10 室）。運営は共生舎が担当し，高良真木が代表。当初は何人か居住していたが，急坂ということもあり，2010 年には高良真木が一人で住んでいた。

（2）『高良真木画集』，求龍堂，2011 年，126 頁。

（3）高良とみ『非戦を生きる―高良とみ自伝』，ドメス出版，1983 年，250 頁。

（4）高良とみは，タゴールの第 2 回目（1924 年）と第 3 回目（1929 年）の来日について，その実現に主導的な役割を務めた。たとえばタゴールが北京に来ることを知って電報を打ち，朝日新聞に連絡をとって来日を実現させた。高良とみが動かなければ訪日は無かった（高良留美子メモ）。

（5）魯迅日記では 32 年。「高良とみ年譜」（柘植恭子『非戦を生きる―高良とみ自伝』，ドメス出版，1983 年，228-249 頁）では 35 年となっているが，正しくは 32 年で，後に差し替えた（高良留美子メモ）。
真木によれば，高良とみは魯迅に会った時，いろいろと話したかったが，魯迅が，言わなくてもすべてわかっているという様子であったので，話せなかった，という。このときに魯迅からもらった書幅を，高良真木・留美子姉妹は 2010 年に東北大学へ寄贈。

（6）高良留美子「「妻として母として」―内側から見た高良とみ」前掲『非戦を生きる―高良とみ自伝』，189 頁。

（7）社・日中友好協会編『日中友好運動五十年』，東方書店，2000 年，43-44 頁。

（8）前掲『非戦を生きる―高良とみ自伝』，140 頁。

（9）前掲『非戦を生きる―高良とみ自伝』，141 頁。大谷育平『引揚交渉録―戦後，中国に残されたた日本人 3 万人を祖国へ』，白帝社，2012 年，参照。

（10）前掲『非戦を生きる―高良とみ自伝』，143 頁。

(11) 前掲『日中友好運動五十年史』，41 頁。
(12) 日本中国友好協会全国本部編『改訂新版日中友好運動史』，青年出版，1975 年，56 頁。帆足，宮腰の 7 月に開かれた歓迎報告会は，大阪の扇町プールに 1.7 万人が，名古屋の大須球場では 4 万人が集まり開催されたという。
(13) 高良とみ「祖国の婦人に訴える」『高良とみの生と著作』，第 6 巻(和解への道 1951-54)，ドメス出版，2002 年，218-248 頁。
(14) 永原和子，米田佐代子『おんなの昭和史・増補版』，有斐閣，1986 年，186 頁。
(15) 小林登美枝「解説」前掲『高良とみの生と著作』，第 6 巻，505-509 頁。
(16) 高良留美子前掲「「妻として母として」—内側から見た高良とみ」前掲『非戦を生きる—高良とみ自伝—』，186 頁。
(17)「年譜」前掲「高良眞木画集』，116 頁。
(18) 高良留美子前掲「「妻として母として」—内側から見た高良とみ」前掲『非戦を生きる—高良とみ自伝—』，196-197 頁。
(19) 高良留美子前掲「「妻として母として」—内側から見た高良とみ」前掲『非戦を生きる—高良とみ自伝—』，199 頁。
(20) 高良留美子「高良真木という人」前掲『高良眞木画集』，114 頁。
(21) ウイキペディア（1953 年の日本女性史）によれば，そのほかの団員として宮城藤子，赤松俊子，千葉千代世，村上トク，小笠原貞子，高橋志佐江，遠藤千枝。http://ja.wikipedia.org/wiki/1953%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E5%A5%B3%E6%80%A7%E5%8F%B2（最終閲覧日，2013 年 1 月 24 日）
(22) 留美子によれば，真木は婚約が守れなくなり，つらかったようである。後年，浜田と一緒にリッチモンドへ行ったが，「一月くらい前に亡くなっていた。ずっと病気だったが，世話をする人はいた。墓は見つからなかった」と言っていた，という（高良留美子メモ）
(23) 久保田博子談。
(24) ウイキペディア（1953 年の日本女性史）参照。同記載事項によれば，「ブタペストでの世界平和協議会に参加予定で滞欧中の大山柳子が急遽，大会最終日前日に出席，日本代表に代わって報告」とある。http://ja.wikipedia.org/wiki/1953%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E5%A5%B3%E6%80%A7%E5%8F%B2（最終閲覧日，2013 年 1 月 24 日）
(25) 浜田の回想によれば，高田は「共産圏に行くと，政府は今後進歩的な国際会議に行く人々に旅券をおろさなくなるだろう」と反対（浜田糸衛「私のかかわった戦後初期の婦人運動—平和のための統一戦線を求めて—（要約）（1945 ～ 53 年）婦連刊」）。
(26) 米田佐代子『戦後日本の女性史』（新日本出版）によれば，この帰朝報告会は全国で開かれ，25 万人が参加したという。ただし，共産党から参加した小笠原貞子（キリスト教婦風会）の名前は出ているが，浜田糸衛，高田なお子の名前がでていない，という（真木インタビュー）。
(27) 前掲『高良眞木画集』，118 頁。
(28) 監修・資料：高良真木，作成：久保田博子「浜田糸衛が選んだ道　1907-2010」『浜田糸衛を送るつどい』。
(29) 浜田糸衛「デモクラシイニ，ナッタナラー」『あまとんさん』，農文協，1995 年，66 頁。
(30) 浜田糸衛『野に帰ったバラ』，理論社，1960 年，196 頁。浜田糸衛『豚と紅玉』，アンヴィエル，1980 年，177 頁。
(31)「あとがき」前掲『豚と紅玉』，176 頁。
(32) 早稲田大学図書館所属，湯浅芳蔵書を安藤隆造氏に寄贈したとの印あり。
(33) 高良とみは，ソ連で会って中国に招へいした南漢宸が批判されて自殺したため，文革に対しては批判的であった（高良留美子メモ）。
(34) 単秀明「寧夏よりの手紙」『結成 30 周年記念　友好をめざして—友好・平和・女性—』，日中友好神奈川県婦人連絡会，31 頁。
(35) 高良真木「主催者あいさつ　浜田糸衛を送るつどい」日中友好神奈川県婦人連絡会『事務局ニュース』，NO.4（第 35 期），2010 年

(36) 前掲『結成30周年記念　友好をめざして—友好・平和・女性—』，1頁。
(37) 前掲『非戦を生きる—高良とみ自伝』，177頁。
(38) 1924年の孫文の来日には大きな関心が持たれ，大阪朝日，大阪毎日，神戸新聞社などの共同主催の講演会では，3000人の聴衆が熱心に耳を傾けた（伊地智善継・山口一郎監修『孫文選集』，第3巻，社会思想社，1989年，361頁）
(39)『事務局ニュース』，NO.2（第36期），2011年。
(40) 高良留美子「高良真木という人」前掲『高良真木画集』，114-115頁。

Abstract

The Movement of Friendship between Japan and China: Past, present, and future

—Based on the oral history of Maki Kora—

Atsuko Shimbo

Restoration of diplomatic relations between Japan and China was realized in 1972, making this year the 40th anniversary. During these 40 years, the friendship between Japan and China has been supported by many people with good will.

Ms. Maki Kora (1930–2011) exerted herself for many yearson behalf of this friendship movement, serving as the chairperson of a Kanagawa women's liaison committee of friendship between Japan and China, which was organized in 1975 and no longer operated after restoration of diplomatic relations. Regrettably, Maki Kora died on February 1, 2011, due to lung cancer.

Her mother, Professor Tomi Kora (1896–1993), was a famous scholar. She graduated from the Japan Women's College in 1917 and went on to study at the Graduate School of Columbia University and at Johns Hopkins University. Her speciality was Educational Psychology, and she obtained a PhD. In Philosophy.

After going back to Japan in July 1922, Tomi Kora became a professor at the Japan Women's College. She personally visited famous Indian poet and Nobel Prize winner Rabindranath Tagore (1861–1941), well-known Chinese author Lu Hsun (1881–1936), and Gandhi (1869–1948).

After World War II, she played an active part as a Councilor, and exerted herself for the improvement of Japan-China relations.

Her daughter, Maki Kora, studied in the United States for 3 years and returned to Japan after World War II. She also studied painting in Paris for two years.

After coming back to Japan, Maki Kora began to live with Ms. Itoe Hamada (1907–2010) who was engaged in a social movement and who was Tomi Kora's friend. Maki Kora and Itoe Hamada lived

together for about 50 years.

Under the influence of Itoe Hamada, Maki supported the activity of the Kanagawa women's liaison committeeof friendship between Japan and China over many years. She exerted herself on behalf of a grassroots exchange program for women traveling between Japan and China.

This author interviewed Maki Kora on November 6, 2010, in the year prior to Maki Kora's death. The author was overwhelmed by Maki's depth of feeling toward China. The subject of this paper is to analyze where Maki's posture and ethos toward China originated by examining her oral history and related data.

In 2012, various inconsistencies and confrontations between Japan and China surfaced, ignited by the nationalization of the Senkaku Islands. Currently, the relationship between Japan and China has reached a great turning point.

Therefore, it is meaningful to look back on these 40 peaceful years through the eyes of a woman who exerted herself for a women's grassroots exchange between Japan and China. It is important to record the life and deeds of this woman who supported peaceful and diplomatic activities after the war.